

日本SOD研究会報

特集 丹羽療法レポート

乳がんは
手術で治るがん
マンモグラフィーは
過剰な検診

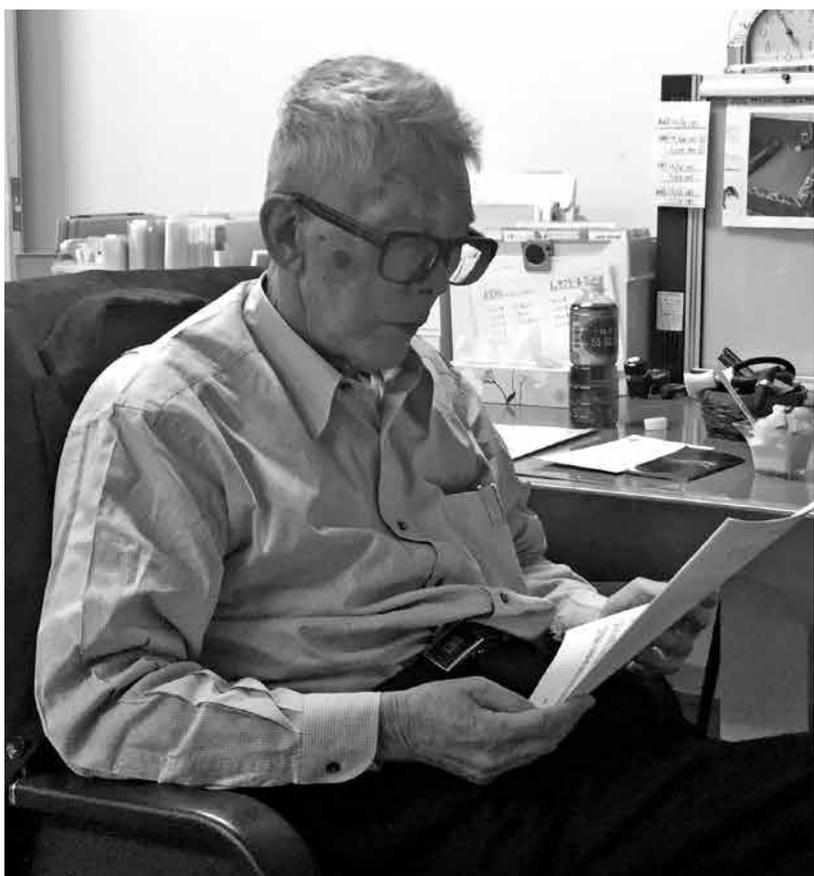
発行元 日本SOD研究会 宮城
住 所 〒158-0094
東京都世田谷区
玉川1-15-2 B棟 2802
TEL. 03-5787-3498
協力：株式会社丹羽メディカル研究所
<http://www.niwa-medical.com>

乳がんは手術しないほうがいい、いやしたほうがいい。抗がん剤は、マンモグラフィー検査は、などと乳がんひとつでも様々な意見があります。とくにここ数年、本屋さん、ベストセラーコーナーに必ずと言っていいほど、西洋医学に一石を投じる本が並ぶようになってきました。さらに週刊誌でも毎月、医学界にメスを入れるような特集が組まれるようになりました。西洋医学一辺倒の治療法に医師たちも疑問を呈するようになってきたということでしょう。先日は、20年以上も前に出版された生物学博士の三石巖先生が書かれた「医学常識はウソだらけ」（祥伝社黄金文庫）が、書店で平積みになされていました。先生はすでに亡くなられているのに、ベストセラーになっている。医学界が大きく変わろうとしている証かもしれません。

そんななか、今回は乳がんについて丹羽先生にお話を伺ってきました。国立がん研究センターの発表（2016年）によると、乳がんは女性のがん死亡原因5位でした。さらに30歳から64歳に絞ると1位でした。50年前の統計の実に3倍以上になっているそうです。

——今回は乳がんについて伺います。先生の著書『がん治療究極の選択』（講談社新書）のなかで、乳がんは手術で治る可能性の低いがんとおっしゃっていますが、なかにはそれはがんではないから手術は不要という意見も聞かれます。どうなんでしょうか。

丹羽先生「乳がんは、手術で完治できる数少ないがんのひとつ。手術できるのであれば絶対にしたほうがいいです。素人判断でしこりがあるのに大丈夫などというのはいけない。しこりが分かったらすぐに取るべき。大きくならないしこりはがんでないと言っても、いずればがん化する可能性が高い。異物ができること自体、何らかの異変なんです。人間、すべての人にがん因子はあるんです。それがストレスや食生活、化学薬品、大気汚染などの理由でがん化していくわけです」



——どうして乳がんは完治できる
がんのひとつなのでしょうか。

「乳房というのは、心臓をはじめとする内臓の中にはないです。つまり外にあるから、転移しにくいんです。手術をしたときに他の臓器に散ることもない。手術で完全に
取りやすい部位なんです。しかし、それを放置しておく、進行して肺や肝臓に転移します。転移して

しまつのはたいいてい、乳房を温存したために、手術してもがんをすべて取り切れなかったり、ためらっていて手術するのが遅れた場合です。うちにもそれががんが転移してしまつた患者さんは多いです。乳がんこそ、早く手術していれば大丈夫なんですから」

——他のがんは？
「乳がんの他にもうつひとつ大丈夫な

がんが、前立腺がんです。これは、乳がんみたいに手術なんかしなくても放っておいて大丈夫な感じです。逆に余計なことはいらないほうがいい。特に高齢者こそ手術はしてはいけません。ホルモン治療で大丈夫です。乳がんと前立腺がん以外のがんは、手術で取れて延命はできるけれど、完治は難しいです。

——このがんは、手術で取り切つたと言つても、どこかに根つこが残るんです。転移再発の可能性が高い。転移再発を遅らせるには、ストレスをためないで、食事に気をつけ、空気のきれいなところに住むことです。そうすれば、寿命が、がんが、どちらで亡くなつたかわからない」と

——その環境は現代人にはなかなか難しいですよ。

「そう。ですから、食生活だけでも改善したほうがいいでしょうね。特に乳がんの場合、肉乳製品はいけません」

——それはどうしてでしょうか。

「女性ホルモンにはエストロゲン（卵胞ホルモン）とプロゲステロ

ン（黄体ホルモン）という2種類がある。この女性ホルモンが過剰になって乳腺を刺激することから乳がんができる」

——近年、増加傾向にあるのはどうしてでしょうか。

「昔、日本人は肉や乳製品をほとんど食べなかった。その頃は生理がもう終わってしまった女性に乳がん患者はあまりいなかった。ところが、終戦後、欧米の食生活になり始めてから、生理が終わってしまった女性の乳がんが出てくるようになった。どうしてかと言つと、肉や乳製品を食べるようになったから。肉乳製品を食べると、自分の体内で女性ホルモン、卵胞ホルモンを作らなくても、食べた肉が副腎に行つて女性ホルモンに変わるんです。自分は作らなくても、食べた物からホルモンができてしまつわけです。さらにアメリカは、肉食社会で環境汚染、ダイオキシンの汚染もひどい。それらが卵胞ホルモンの作用して、乳がんの患者がものすごく多い。アメリカの乳がん患者は中高年の10人にひと

りの割合です。これはすごく高い割合ですね。最近では日本でも70、80歳のお年寄りの乳がん初発、再発がそろそろいるんです。これも日本人が若い人だけじゃなく老人も肉を食べているという証ですね」

——肉乳製品はすべて食べないほうがいいのでしょうか。

「できれば食べないほうがいい。特に豚の脂がよくない」

——てっきり牛肉の脂が良くないと思っていましたか。

「もちろん牛も良くないが、いちばんいけないのが豚です。肉の中でまだ食べてもいいのが鶏ですね。次に牛。豚は脂も肉もだめです。乳がんにかかったことがある人は特に気をつけてください。よく、乳がんには大豆に含まれるイソフラボンが良くないといいますが、そんなのあまり関係ない。大豆製品は良質のたんぱく質だから食べていいです。あと、豚は男性にも良くない。とくに痛風の人には絶対にダメ。一発で症状が出ますよ」

——国産のものでいいのでしょうか。アメリカなどの牛や豚

は、抗生剤や成長ホルモンを使っているからいけないと聞きますが。

「国産でも、抗生剤や成長ホルモンを使っていることもあり、それが乳がんのもとになる場合もあります」

——抗がん剤はどうでしょうか。

先生は、乳がんには抗がん剤が比較的効果的だと書かれていますか。

「他のがんに抗がん剤は百害あって一利なしですが、乳がんには比較的效果的です。延命効果はあります。と言ってもそれは、手術で取り切れなかった場合に使う抗がん剤であって、そうでない場合はやはり良くないです。例えば、手術の前にがんを小さくさせるための抗がん剤や、取り切った後に再発防止のために抗がん剤、というのはいけません。とんでもない。再発防止のもつりですが、再発を誘発するようになることになってしまいます」

——では、手術をしなければ、あとは余計なことはしないで食事などに気をつけることですか？

「そのとおりです」

——そのためには検査での早期発

見も大事だと思うのですが、マンモグラフィ検査などは必要なんのでしょうか。

「必要ないです。マンモグラフィやレントゲン、CTなどの検査は、放射線を一度にいっぱい浴びるから身体に良くないです。眠っているがん因子を起こしてしまう。乳がんなどは自分で触れて、しこりがあるかないかを確認すればいいんです。あつたら取ればいい。不安なら、エコーで診てもらえばいい。その程度の時期の発見で十分に手術で治ります。検査というのはある程度必要ですが、どこも悪くないのにパッケージ化された検査を受けるのは意味がない。とくに放射線関係の検査は、極力避けることです。具合が悪くて検査をする、病気になるってしまつてからのある種の検査は必要ですが、そこではないのに余計な検査はしないほうがいい。検査で予防した気になつているのが一番いけない。それより、日々の生活を見直すほうが大事です」

丹羽先生も余計な検診よりも、自覚が大事とおっしゃっています。最近の週刊誌などの記事でいろいろな医師が提唱していることもおおむね同様のものでした。記事によると、マンモグラフィ検査は日本人には不向きで、がんの判別が難しいこと。スイスでは医療委員会がマンモグラフィ検査の廃止を勧告し、欧米各国で死亡率低下効果が見られないどころか、逆に過剰診断が3分の1もあつたとしてマンモグラフィ検査は減少しているといえます。逆に日本は欧米に比べマンモグラフィ検査を受ける女性が少ないからピンクリボンキャンペーンなどで盛んに推奨し始めたばかり。しこりという自覚症状では遅いとばかり超早期発見に向かっているような気がします。



大酒、美食、不摂生、 メタボ、なんでもOK!

一冊目は、川越にある帯津三敬病院の名誉院長で、がん治療にホリスティック医学を取り入れていらっしゃる帯津先生の新刊を紹介。先生は、文筆家としても才能を發揮し、数多くの本を出版されています。なかでも本書はタイトルからしてお分かりのように、最高にハッピーな気分させてくれる一冊。なにしろプロフィールに一升瓶のお酒を抱えた写真を載せるくらいですから、かなりお茶目です。ちなみに御年81歳。

同世代の丹羽先生とも交流があり、互いをリスペクトしている間柄。帯津先生は東大医学部を卒業後、外科医としてがん手術の第一線で活躍していたのに、いちばん脂の乗っている40代で大学病院(系列も含め)を辞め、帯津三敬病院を創設しました。理由は、がんを手術で完全に切り切ったのに、数年後ほとんどの患者さんが再発してしまい、抗がん剤治療などで苦しんで亡くなられることに疑問を感じたからです。がんは手術だけ

では治らない、西洋医学がすべてではないと感じ、自身の病院で西洋医療に漢方、気功、ホメオパシーなどを取り入れたホリスティック医学(体全体を診る医療)を始めました。

BOOK
紹介
1

『不養生訓 ときめきのススメ』

帯津良一 著 (山と溪谷社刊)

それは西洋医療に代表される治しの医学と、代替治療が担当する癒しの医学の統合でした。

さて、その新刊、とにかく面白いのです。大酒、美食、不摂生、メタボ、なんでもOK!と言い切る医者者が勧める不養生訓とはいかに。

体が要求しているものは 薬だと考える

先生の体験からなるこの不養生訓は、お酒好きの先生らしく、お酒と食の話から始まります。

「休肝日はないほうがいい。さらに酒を飲むことにしている。(お酒とはアルコール類全般)周囲はアルコール依存症ではと心配してくれるが、ウィークデイは晩酌だけで十分なので、依存症ではない」といいます。毎日の晩酌にときめきがあふれて、そのときめきこそが生きがいであり、最大の養生であるということ。だから、食へ物も、

「好きなものを少しだけ食べる。好きなものは体が要求しているのだから、薬にあるべし!」

となる。体が要求しているものは薬だと言われると、生ビールやとんかつも罪悪感なく楽しめる気がしてきます。

先生は70歳を過ぎてから、毎日が最後の晩餐だと思つようになっているそうです。そのわけは、「患者さんが抱く死に対する不安を

和らげることも私たちの仕事のひとつ。死の不安があると免疫力や自然治癒力がのびのびと働かないからである。死の不安におののく末期患者に安心感を与えることができるには、その患者より死に近いところ立たない限り役に立たないということになる。そこである時から今日が最後と思つて生きることにしたのである」

だからこそなおさら、好きなものを飲食するのでしょう。生野菜はキリギリスが食べるものとうそぶき、今でも食べない。糖質ダイエツトなど愚の骨頂。米飯が大好きで、塩分こそ和食の粋という。塩分は高血圧や胃がんの原因になると言われてもまったく気にしないで人一倍塩分をとっている。塩昆布茶、筋子、塩辛、塩昆布、漬物はいつでも来い!と言いつつ。

メタボ? 大きなお世話!

メタボは気になりますか?」
先生と交友の深い作家の五木寛之氏が尋ねると、
「メタボリックシンドロームとか、

余計なお世話ですよ」

といい、おそらく少々太めのお腹をゆすりながら、満面の笑みを浮かべたはずです。ちなみに先生のデータは、腹囲98cm、中性脂肪175。全国健康保険協会の基準値からすると、立派なメタボ診断が下されます。でも先生はそんなの関係ないと言わんばかりにこう言います。毎日毎日、腹囲を気にして、2合飲みたい晩酌を1合にして、やがて死に直面して狼狽する。そんな人生送りたくない！と。そこには、氣功歴45年、現役医師として毎日病院中を歩き回って診察し、フットワーク良しという自覚があるから、そして毎晩、晩酌時間まで至極の極みを過ごしているから、多少の乱れは全く気にならないそうです。

「健康とは本来、そういうものなのだろう」

が先生の持論であり、多くの医師が指示している事実なのかもしれません。

そんなメタボと同様、コレステロールも健康の敵とみなされ、盛んに悪玉コレステロール値のことが取りざたされていますが、これ

に關しても帯津先生は学術的観点から解説。

「コレステロールというのは、さまざまな脳細胞や免疫細胞の細胞膜などに必要な成分で、少なすぎると機能低下に陥る。さらにホルモンの原料もコレステロールからできている。特に骨を強くする作用、血管を動脈硬化から予防する作用などを担っているエストロゲンは健康のために欠かせない物質」

また、先生の経験から、がん患者さんの多くはコレステロール値が低いと言います。

「コレステロールはこんなにも多く人体に貢献しているのである。動脈硬化の誘因、という点だけでコレステロールを非難するのはいかなるものだろうか」

医療に必要なのは治療成績ではなく温もりだ

このように先生の81年に及ぶ人生の経験、60年近くになる医師としての経験、体験からつづられる話には、そうだそうだと思わず相槌を打ってしまいます。なかでも

「医療より癒療」という項目には、感銘を受けます。

「がん治療の現場から医療本来の温もりが失われて久しい。がんの治療成績を向上させるためには、早期発見の上昇でもなければ新薬の発見でもない。医療の現場が本来の温もりを取り戻すだけでいいのである」

まさに医療より癒療。先生はこのことを20年以上叫んできました。医療現場に身を置くすべての人々が相手の生きる悲しみを敬いあえばいいのであるよ。

「ところがこれがなかなか手強い」
なぜなら、人間性を一切問わない入学試験と、医師国家試験合格至上主義の医学部教育にその原因があると言います。

「決してあきらめない」
どこまでもこの道を歩み、言い続けると力強く書き記しています。

先生は晩酌こそがと言いますが、そう言いながら、根底には温もりのある医療、ホリスティックな医療に日本の医学界が向かって

れることを願い、実践することを生きがいに行っているのだと思います。温かく、大きく、そして微笑ましい一冊です。

食生活の管理や検査の数値に一喜一憂している方、今の医療に疑問や不安を感じている方、健康に自信がない方、健康だけが将来が不安な方、ぜひともこの本を手にとってみてください。



不養生訓

帯津良一ときめきのススメ

大酒、美食、不摂生、メタボ、何でもOK！
81歳でシニアしている私が証明

帯津さんはいつも元気だ。ご自身が生きたレビアンズでいうしやる。
その言葉に誰もがはげまされることだろう。

五木寛之

インフルエンザでは死ななくてもワクチンと解熱剤やタミフルなどの副作用で死に至る

続いて紹介するのは、がん治療の常識を変えた近藤医師が、新たなタブーを指摘する新刊です。

ワクチンと聞くと真っ先に浮かぶのがインフルエンザワクチンです。子供の頃に受けた日本脳炎、BCGなどのワクチン接種に始まり、最近よく耳にする肺炎球菌ワクチンまで、日本では多種多様なワクチンがあります。みなさんは、これらを摂取するかどうかは個人や親に任されている、つまり任意接種だということをご存知でしたか。以前はほとんどのワクチンは義務摂取だったそうですが、摂取したことによって死亡、知能低下、四肢マヒなどの副作用が相次ぎ、裁判で国が敗訴したこともあり、義務化を廃止したそうです。近藤先生は言います。

「この制度変更は、国が敗訴から得た教訓で、副作用の事故があっても賠償責任を負わなくて済むようシステムを作りかえたのです。国

はワクチンを推奨するけれど、なにか不都合が生じたら自己責任ですよ」

でも、私たちはお医者さんから勧められれば、無条件にワクチンが必要なものと思いついてしま

BOOK
紹介
2

『ワクチン副作用の恐怖』

近藤誠著

(文芸春秋刊)

ます。果たしてそうなのでしょう。この本は、そんな知らず知らずのうちに受け入れている、信じ込んでいることが、実は怖いことだということを知らせてくれる一冊なのです。

丹羽先生も以前より、

「ワクチンはウイルスに対する抗体を作るために少量のウイルスを体内に意図的に入れるもので、免疫力や抵抗力の低い乳幼児や子供、お年寄りやワクチン接種すれば、逆効果。ワクチンで100%病気が防げるのならまだしも、効果に対する確たる根拠がないのに接種して、その副作用で肺炎などにかかっては元も子もありません」

ワクチンはいらないとはっきりおっしゃっています。

そんななか、近藤先生もワクチンの危険性について明言したのです。本書の帯に書かれている以下の箇条書きを見るだけでも、恐ろしさが分かります。

- ◎ 乳児に7本同時接種で急性脳炎症
- ◎ 川崎病発症に、BCGその他のワクチンが関与している
- ◎ HPVワクチンで子宮頸がんは防げない
- ◎ 麻しん(はしか)ワクチンに脳症のリスク

◎ B型肝炎ワクチンで多発性硬化症

◎ 接種直後に心肺停止でも専門家は因果関係を認めない

◎ 新型インフルエンザワクチンの異常に高い死亡率

本書ではそれぞれに根拠やデータ等も記載され、これまで医者が教えてくれなかったこと、国や厚労省が隠していることを教えてくれています。ここでは身近で気になるインフルエンザワクチンについて紹介しましょう。

今期はワクチンの量が少なく、替では騒ぎになっていましたが、それでインフルエンザがいつもより爆発的に流行したという話は聞かなかつたように感じます。

「インフルエンザワクチンで感染を防ぐことはできません。ウイルスは毎年のように変異しているのに、型が違うことの方が多い。風邪やインフルエンザは感染することによって自然の抗体がつけられ自己免疫力が高まります。だからもしも移ったら、これで将来に対する免疫力が強化されたと考えるのが穏当でしょう。そしてもっと大事なのが、絶対に解熱剤を使わないということ。インフルエンザはただの風邪です。乳幼児もインフルエンザでは死にませんが、死ぬ子や脳症が出るのは、解熱剤や抗ウイルス薬(タミフルなど)を使うからです。高齢者はインフルエン

ザをきつかけとする肺炎で死ぬことがありますが、これをワクチンで防げるかという点も難しい。もちろん肺炎球菌ワクチンも無力です」

多くの感染症が減少しているのはワクチンのおかげではなく、戦後、日本人の生活環境と栄養状態が良くなり、免疫力が上がったことが大きな要因だと言います。なのにワクチン効果のようにデータが作られていること。そしてほとんどの感染症がもはや日本では発症していないのに毎年ワクチンを推奨する矛盾。とくに乳幼児のワクチン接種の量は危険すぎると言います。

「結核はいまや高齢者しか発症していない。敗戦前後に結核に感染した人たちの肺内に結核菌が残っており、高齢で抵抗力が低下するとともに発症するのです。だからすべての乳児にBCG（結核予防）を接種する必要はないのです」

このように結核だけでなく、破傷風、ポリオ、麻疹（はしか）、百日咳、風疹、シフトリアなど、19世紀ならいざ知らず21世紀のしかも日本ではほとんどない病気に、副作用の大きいワクチンを接種す

ることの危険。先生はそのことを強く訴えています。

「人は古来、一度に感染するのは、ひとつの病原体に限られてきました。混合ワクチンなどで一度に複数の病原体がからだに入ってくることに慣れていない。それらが体内に殺到したときの免疫システムの混乱ぶりは目に見えるようです。混乱するだけならまだしも、遺伝的素質やその日の体調によつては、免疫システムの暴走は、重大な副作用をもたらすことがあり、最悪死亡するにいたります。わが子に自然にそなわる抵抗力をもっと信じて。それがいちばん安全確実に子供を育てる秘訣です」

専門家は保身のため ワクチン副作用を 否定する

乳がんを始め、がん治療に従事していた先生が、どうして専門外であるワクチンについて調べるようになったのか。それは、医療被害者を支援する弁護士さんたちと知り合い、ワクチンで被害にあった子供らの悲惨な現状に胸を打た

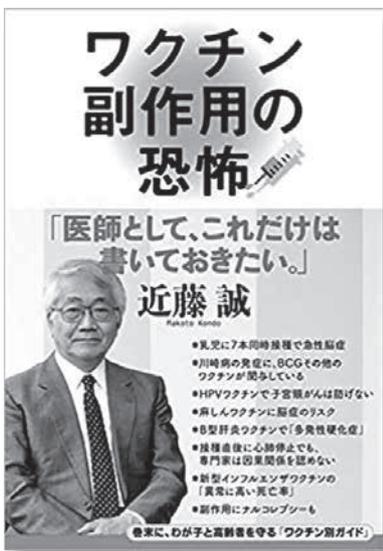
れたからだそうです。そうして調べていくうちに、厚労省のワクチン審議会の委員たちの隠蔽体質にぶつかりました。

「ワクチン接種直後に死亡しても因果関係が不明、情報不足などと称して副作用と認定せず闇に葬ってしまう。副作用であることを否定してしまうのは、現に後遺症で苦しんでいる、あるいは亡くなられた人たちを、子供らを冒瀆する行為です。そして将来にも同じ副作用が発生することを許す点で、人々のために尽くすべき医師の所業とは思えません。このまま放置していたことは、間接的にせよ、傷害罪や殺人罪に相当する行為だといえるのではないのでしょうか。こういった彼らは何も変わらないのでしょうか。なぜなら、ワクチン業界から追放されては食べ、べていけなくなるから。ワクチンを打っている小児科や内科医にとつてもワクチンは重要な生活の糧になっています。そういう人たちにワクチンは安全です、必要ですと言われた場合、どうするのかはみなさんの判断にゆだねられま

す」

ここまで言い切る先生のその想いに胸を打たれます。この本は現場のお医者さんたちにこそ見ていただきたい一冊だと思いました。最後に職場や学校など集団で半ば強制的にワクチンを打たなければいけない場合の回避方法も教えてくれています。ちょっと変人扱いされるかもしれませんが、子供や自身の安全のほうに大事。

「ワクチンは法律で個人や親の判断と決められていますから、子供に後遺症が出ることはない保証してください。出たときには賠償しますと一筆書いてください。そうすればワクチンを打ちます」
こう言えばみんな黙るそうです。さすが近藤先生です。



※あくまでも、著者である近藤医師の意見であり、当会報は、内容をすべて肯定するものではありません。

SOD様作用食品とは 丹羽博士の開発

SODとは、スーパーオキシド・デイスムターゼの頭文字をとったもので「活性酸素」を取り除く「酵素」のことです。

最近、健康の力ぎを握る物質として「活性酸素」と「SOD」の働きと役割がクローズアップされてきました。そして、活性酸素が体内に増加すると、がんや成人病など、さまざまな疾病を引き起こすことが明らかになりました。

体内に活性酸素が増えても、本来、人間や動物には余分な活性酸素を取り除くSODという酵素が存在していて、病気を防ぎ、身体の健康を守ってくれます。ところが、現代社会の弊害（公害、薬害、食品添加物の害）などが、活性酸素を暴走させていて、体内のSODだけでは追いつかなくなっています。

しかし、残念なことにSODという酵素は分子量が大きいために内服しても胃で破壊され、腸から吸収されませんでした。それを、内服できるように研究されたのが丹羽SOD様作用食品です。

開発した丹羽朝負（耕三）医学博士は、京都大学医学部を卒業し、医学博士として数々の研究が注目を集めていたときにご子息を白血病で亡くされ、それをキッカケにSODの研究を始めました。副作用がまったくないがん治療薬、がテーマでした。開発には実に



二十年もの歳月が必要でした。

「活性酸素をはじめとする免疫学の研究を通して私が知った、自然の摂理」は、私に大自然のメカニズムの精微さと人間の自己治癒力の偉大さを教えてくれました。病気は自分が治すもの、私は、この理想を患者さんの誰もが実現できるように医師の立場から最大限の努力を続けています。」

先生は今も、土佐清水病院院長として、毎日、医療の現場でがん、アトピー、膠原病などの難病に苦しむ患者さん達の治療にあたっています。また、SODなどを始めとする論文は海外でも高い評価を得、日本のみならず海外の学会で講演をしたり、大学病院で特別講演をしたりと、多忙な日々を送っています。

幸いなことに最近、西洋医療と東洋医療などを統合した医療へと世の中の流れが向かっています。代替医療に対する関心や認識も高まり、丹羽博士が40年も前から言っていた、本当の意味での人を診る診療の時代です。

この会報は、そんな丹羽博士の志を受け、誰もが自分の力で健康でいられるように、難病で苦しむ方が少しでもなくなるようにとの願いを込めたものです。

SOD研究会からのお知らせ

いつもSOD研究会報をご覧いただきありがとうございます。

最近、特に当研究会へお問い合わせいただくことが多い内容についてお知らせ致します。

「丹羽耕三博士のSOD様食品は金の笠のシールが貼られていれば、どこも同じものなのでしょうか?」というような、ご質問をよくいただきます。

その回答としましては、金の笠（管理番号付）シールは丹羽免疫研究所で分析・検定し、エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で開発当初から、厳しい品質管理のもとに伝統的な製法で造られる製品だけに貼付される信頼の証（マーク）でした。しかし、ここ数年前より丹羽先生の考えで別の工場で製造されたSOD様食品にも金の笠のシールが貼られ、販売されているものもあります。土佐清水市の工場で製造されたか、そうでないかを見比べる一つの目安が、まず金の笠シールの特徴にあります。

エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で製造されている製品シールの特徴



原寸大 横 30mm、縦 25mm

- 管理番号は6桁
※土佐清水で製造された証明の通し番号となっています。
- シール左部分に絵や記号が記載されている
※左部分の表示は製品管理の為、不定期に変わります。
- 他の工場で製造された製品と比べ、原末の味や色、粒の大きさが違う場合などがある